

菩提を御訪ひ申し上げた。

一八二

親房は前にも云つた如く五代の天子に御仕へ申して大に人望が有つたのに、斯く突然と出家せられたもので有るから、此の世良親王様のやうな立派な方を失つた嘆に添へて、又此の良臣を失つたのをば、天子様も他の臣下もすべて惜んだといふことである。——親房が佛學に詳しく「正統記」にいろ／＼佛法の事を書いて居るのも一旦は僧になつたからで有る。

斯くする中、天候ますます悪くなり、包むとすれども朝廷の御隠謀が何時かは洩れて武家の方でも戦争の準備がなり、其の明年は元弘元年の八月、野分の風の吹くと俱に、遂に天下の大亂と成つた。武家方からは先づ朝廷を包圍せよとのことで、六波羅の軍兵ども寢耳に水と押寄せた。二十四日の眞夜中頃、斯々と聞かせられた後醍醐天皇陛下、三種の神器を御身に着け、女車に御身を任せ、北の御門から御出になり、所は大和の國境、笠置寺へと御行幸あそばされた、勿体なくも行幸とは申すものの、實は武家の鋒先を御避になられたので有つた。

然るに、間も無く笠置寺は賊に陥され、後醍醐天皇様は山深く一夜を松の下で明かされた。その時で有る、かの

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠家もなし

と御詠あそばされたのは。——然るに、御従申した藤原藤房、具行、師賢などと皆捕へられて、——有るべきことか天皇陛下は、其翌年又候ふ隠岐國へと御出になつた。

山寺に明暮御經を誦んで居る親房、これらを噂に聞いてドンナ感がしたで有らう。世は遁れても心は常に君國の御側は去らぬ親房、世の淺猿しさに泣いたであらう。

併し、其の翌年、元弘三年には、天皇陛下が年來の御志なる鎌倉の高時は新田義貞の爲に亡されて北條氏は爰に滅亡に及んだ。乃で陛下は御無事に隠岐國から立派な行列で京都に御還幸あそばされた。其の時楠正成は兵庫まで御迎に出るし、僧侶で入らした尊雲法親王の護良親王は清らかなる男に還俗し玉ひ、赤地の錦の鏡直垂を召して太く逞しき馬に跨り、一騎當千の武士を連れて御供をするといふ有様で、御都入は實に盛なこと

一八三

で有つた。

陛下御還幸の後は天下の政事を親しく御執りになり、後日の事はともかくにも日本の天下は、今や初て王政復故の世となつて誠に芽出度い事である。されば一旦は頭を剃し世を暗まして居た大臣方も、天下道有れば則ち顯るゝといふ語の通り、

墨染の色をもかへつ月草の

うつればかはる花の衣に

と云つた風に、枯れにし草木も春に遇ひぬる心地して誰も髪を生して出て仕ふるこゝと成つた。乃で、宗玄法師の親房も亦出て仕へた。――世を遁るゝ時分は鎌倉の武家時代で有つたが、僅か一二年のうちに、出て仕ふる今日は、世は王政の新しい時代で有つた。宛ら正月を迎へたやうな心持がしたで有らう。

頓て位は從一位となり、大臣の格に準せられて昔に勝る厚い待遇を受けた。時に今年は四十一歳、――人間一番エライ盛で有る。

處が折角の王政も二年とは續か無かつたのは誠にをしい。併し是れも時節で有らうと

いふより外に仕方が無い。其の翌建武元年には護良親王が鎌倉に幽せらるゝといふ騒がら始り、翌年は足利尊氏が謀叛をし、其の翌年は正成は討死し、後醍醐天皇様は吉野の行宮に御出になり、京都には光明天皇御立になつて有名なる南朝北朝は是から始り、其の翌々年は義貞顯家討死し、其の翌延元四年には後醍醐天皇御崩御になり、伊勢國に吹き戻された義良親王は御踐祚しまして(後村上天皇)第二番目の南朝の天子と御なりになつた。

此の時は、親房は最中、小田城に在つて戦争をして居つたが、此の悲報を聞いて如何にかなしんだかは前に云つた。加ふるに次の天子後村上天皇様は此の時未だ十二歳の御幼年で有るから、親房は如何にも心細く感じたらしい、遙に書を天皇様に上つて天下の政事は權大納言藤原實世、藤原隆資に御諮詢あそばしませと御諫申し上げた。

それから親房、小田城も一人、頭となる人をほしいと云つて陸良親王を御迎へ申して東國を固めた。此の親王は故護良親王の御子で、御母は即ち此の親房の妹で有る。

併し此の小田治久も元より確な人で無い、仕舞には高師冬に降参した爲に小田城も又

陥った。親房は乃で又、關宗祐の守つて居る關城に據つたが、又師冬の大軍が勝に乗つて攻めて來た、又候ふ此の城も危くなつた。乃で親房再三懇篤なる手紙を陸奥の結城親朝に送つて援兵を頼んだが、此の親朝も此の依頼に應ぜずして又敵に降つて仕舞つた。——當時の世の中、すべてこの通り、將基倒しにバタ／＼で有る。日本人じやとて、世は亂れ、教育の無い時は、このやうな有様で有る。親房の如き忠義な人は實に残念に思つた。——有らう、世を救ふ志の有る人はどうしても筆を執らずには居られまい。

流石の親房も、こうなつては詮方なく遂に關城を棄てて吉野へ歸つた。天皇大に親房を優遇せられて、准三宮の待遇を賜ひ、燈に乗つて宮中に入ることをも許された。抑も此の准三宮とは親王や攝政關白などに時としては賜はるほどの稱號で有つて、太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮の三宮に准じて俸祿を賜はるので、決して並々の人に賜はるもので無い。然るに今親房は大納言で之を賜はつたのを見れば、朝廷の優遇、親房の功勞が甚だ大きくあつたことが察せられる。

斯くて親房、後村上天皇の正平九年行年六十二歳で大和國賀名生といふ所で薨去し

た。——定命とは云ひ乍ら、南朝に盡した其の結果の花をも見ず實をも見ずに薨せらるゝ心の中、後の世如何になり行くことかと思へば、さぞ心残りがしたで有らう。——まだ後取の子供が若いし、家にはいろいろの事件が持ち揚つてる最中に、其の父親が亡くなつたらどうである。親房はこのやうな心で薨せられたことと思ふ。

池の藻屑の話

一八八

一、石山寺詣

下手な話が餘り長いと讀む人にも飽きが来る。それで此の歴史の話もこの「池の藻屑」で止めやうと思ふ。これも此の書物の詳しい説明は止めにして、何時代から何時代までを書いた書物、誰が書いた、其の人はどんな人といふ位で止にする。

あの「増鏡」の出来た時は、既に南北朝の戦争が起つて居たが、これから引續いて日本の天下は實に淺猿しい天下に成つた。足利時代は下剋上と云つて、下の者が上の人を侮つて抵抗をするといふ時代で、是が爲に軍が起り亂が起り家督相續の争も起つて、日本國中戦争だらけに成つて仕舞つた。次について群雄割據、天下に主宰者の無い世の中、日本の天下は殆ど無政府となつて仕舞つた。斯うなつては天下の人は學問などゆつくりして居る所でない、足を伸して寝ることすらも出来にくい。此の時代をば闇黒時代と云つて闇の世の中、あの天照大神様が岩戸隠の淺猿しさを其の儘現した、——この様な

石山寺詣

時代ではトテモ人に學問が無い處から、「増鏡」の次を書く人が絶えて無かつた。

處が後に、豊臣秀吉といふ無雙の豪傑が此の世に出て、あの手力雄命様じやないが、手に黒雲を拂ひのけて再び天つ日影を見ることが出来た。これより文明の曙光がほのめいて来て、大坂城の建築と成り絶えて久しく聞えなかつた木遣の聲やら手斧の響、秀吉などは自身木遣を謳つたほどに此の世の中が陽氣に成つた。次で建てられたのは聚樂邸、昔「増鏡」の尼法師が堂塔伽藍の焼け失せたのを悲んだ反對に、今は天下の樂を聚めるといふ芽出たい此の別荘が出来上つて、天正十六年の五月には、時の天子後陽成天皇様が其の聚樂邸へ御遊に御出になつたといふ、此の何百年間絶えて無つた嬉しい世の中と成つて來た。

此の後とても時々空の隅々端々には怪しい雲が出たは出たが、もう此の様に天下の風向がチャンと定つた上は少々の雲は其の儘立消に成つて仕舞ひ、少し大きい雲の切片は西の風一吹吹けばケも無く飛んで仕舞ふのである。——中にも一番大きかつたのは大阪役と云ふ雲片、關原役と云ふ雲片、隨分大きい雲では有つたが、これとても飛され殘

池の藻屑の話

一八九

つた雲の片で、一つ二つ雷が鳴った位で晴れて仕舞った。

それから後といふものは天氣がシツカリ固つて徳川様の天下は毎日くお天氣續、そこでこれまでの霖雨で萎れて居った草木も木も爰に新に芽を吹いて枝を伸し葉を擴げて、太平の春の風に文明の花が開いてウラ／＼と長閑な結構な世と成つた。

乃で長く絶えて居つた「増鏡」の續きは「池の藻屑」といふ名で現れた。それは人皇第百十八代後桃園天皇様の明和八年の正月、十代將軍家治公の時であつた、——學問や文明の花はどうしても長い月日をかけて培は無ければ開くもので無い、今年丁度徳川家康が征夷大將軍と成つてから實に一百六十九年目、年表を見れば是れといふ可き出來事もない位に治つた時で有る。

さて此の「池の藻屑」の体裁は矢張り「大鏡」や「増鏡」などを真似て、老人の尼法師が御寺に詣つて物語するといふ風に出來て居る、——左に例の如く其の部分を解り易く言文一致体に譯して見れば、

私は或年の八月に、京都に用事が有つて上りましたが、近江國石山寺へは此頃トント

參らぬから、今度こそヨキ序だと思つて道寄をして御參した。

紅葉の時候には未だ早い、場所柄とて秋の景白が面白く、ここ山の姿水の色には浮世の塵が立つて居ない。——見渡せば琵琶湖の水が天に接いて立つ白波にも秋の色が涼しく見える。

成程昔あの紫式部は「源氏物語」を書かうと云ふて遠く此の寺に引籠り、心を潜め思を鍊つたが、丁度八月十五夜の御月見の晩、湖水に浮ぶ月を眺めて急に面白い情が湧いて來て、直ぐ筆を執つて書き上げたのは、「源氏物語」の中の須磨、明石の巻だと傳へて居るのが誠に面白い話で有る。昔はあんな偉い人も有つたがと思ひ乍ら、御佛の御前に行くときと頭が下がて來て心が澄んで極樂へでも行たかの思ひで、辱なさの涙が雫れた。そも此の御佛は、昔奈良朝の頃、陸奥國から出た黄金で御製り申し上げたと聞いて居るが、尊いことだと頼に御前を退る心がしない。

御堂の裡を眺めまはすと參詣したのは自分一人で無い、側の方には老人の尼さんが殊勝らしく珠數おしもんで拜んで居た、——此の老年では遠方の人では無からう、多分近

所の尼さんだらうが、これはヨイ人に出會つたもの、少しは此の邊の噂も聞かうと思ひ付いて近くへ寄り、

「お比丘さんは此の近所で入らつしやいますか、私は遠方の者で、此の邊の事は一向存じませんが、何か面白い御話も御座いましたら、承りたいものでムります、誠に斯うブシツケな御願でムいますが、これも佛様の御引合だと思召して、何か御聞かせ下さいませ。それこそ國へ歸りましたらよい土産になります」と頼んで見た。

すると尼さんも一寸會釋して「あの

白波のよする渚に世をつくす

あまの子なれば宿も定めず

と申しまする歌のやうな尼法師は、一体家も何もムいませませんが、永く京都に住んで居ります。が、しかし此の御寺には願がムいまして時々斯う参ります。今夜も此處で御通夜をして後夜の御勤もいたさうかと存じてをります。

貴女様には御遠方で入らつしやるなら、椿市邊に御宿が御有りなさるんでムいませう

が、今夜は寧私と御一緒に此處で御通夜をなさいませ。

此邊の事は存じませんが、京都の話は少し聞いて居りますので、それなりと御話いたしませう。その方が御國への御土産になりますのでムいませう」と遠慮の無さそうな尼さんで有る。

私は嬉しくて「そんなら今夜は此處で御通夜をいたしませう」と云つて、ふと

飛鳥井の春の心は知らねども

宿りしぬべき花のかげかな

と昔の歌を口吟ますと

流石は尼さん、直ぐと

かりそめと思ひしものを飛鳥井の

御秣がくれいく夜ねぬらん

とこれも古歌を口ずさんで「御通夜の御秣は御氣に召すかは存じませねど」と謎の様な答をして

「あなた様、此の人間の壽命ほどホントニ氣のきかぬものはムりません、命長ければ恥多しとか申しますが、マア本當でムいます。長命は致しましたが其の間にマア嬉しいと眉根の皺の伸びたと申す事はそれこそ尠うムいまするが、其の反對に虎の住む野原に寝たやうな怖しい時がいくらもムりましたが、これでマア命がよく持ち堪へたものだと思ふ乍ら不思議に思ふ位でムいますよ。」

時々昔話を致したくなりますが、舊い友達は皆亡くなつてトント話相手がムまいせん、——それが苦しい存じて居りましたが、嬉しい事には今夜あなた様に御遇ひ申して云ひたい事を思う存分云えまするのが、何よりのたのしみでムいまする」と云つては機嫌の良い笑をする、

私もますます聞きたくなつて「ホントに昔から老人の云ふ事は利益になりますし、後學の爲にもなります。同じく承るならば歴史の御話がよろしうムいまする、——それも昔の所は書物で少しは見えて居りますので、あの後醍醐天皇様が吉野に御遷あそばした時分から後の事が聞きたうムいます。それが承ることが出来ませうか」と問ひます

「私は元よりそのやうな天皇様に關係した事存じて居るやうな身ではムいませず、又申上げまするも勿体無うムいまするが、今晚のやうな時に包んで置くのも如何でムいますから、存じて居りまするだけは少しばかり申上げませう」と云ふて、これから尼さんが御話する、

其の話は、あの「増鏡」の後を直ぐ受けて後醍醐天皇様が隱岐國から御還幸あそばされた所から、第七代後陽成天皇様の慶長八年徳川家康が右大臣となり、征夷大將軍の御宣旨を頂戴し同じき十年將軍職を長子の秀忠に譲つたアタリまで、凡二百八十年間の歴史を話し、終りに細川幽齋が御代の春を祝した歌

八隅しる君が惠を世に受けて

残る隈無き春は來にけり

と云ふのを擧げて結んで居る。

本書の題號を「池の藻屑」と云ふ譯は、此の書の著者が、

かき集むる池の藻屑に深からぬ

底の心のいかに見ゆらん

と詠んで、ツマラナイ、意味の浅いものだと言ふ謙遜から附けた名で有る。

徳川時代の紫式部

一、徳川時代の紫式部

さて此の歴史は、一体誰が書いたか——これこそは伊勢國の人、荒木田麗子と云ふ女の人が書いたので有る。彼の「榮花物語」は昔から、赤染衛門といふ女官が書いたと云はれて居るが、それは確かな證據が無い。又「大鏡」を初め例の四鏡（大鏡、水鏡、今鏡、増鏡の四種は皆鏡といふ名を付けたる故、總稱して四鏡といふ）、これも確に著者が知れぬ。此の「池の藻屑」ばかりは明かに知れて居るのが誠に嬉しい。

然らば此の荒木田麗子といふ人、——此の人は一体どんな人か、どんなに學問をしたか、婦人としては誠に珍らしいことと有る。あの平安朝時代は元より女の天下で、女人には随分學者が有つた、紫式部といふ女官の如きは「源氏物語」と云ふ大きい立派な

池の藻屑の話

小説を書いた、清少納言といふ是れも女官が「枕草紙」と云ふ隨筆（隨筆と云ふは、毎日く思ひ付き次第にいろくの事を書いたもの）を書いて今に至るまで名を轟とどろして居る。其の他の婦人にも歌に巧な人、日記や紀行文に上手な人が少くない。併し立派に歴史を書いたと云ふ人は未だ無つた。——處が、此の徳川時代に於て、嬉しくも伊勢國から婦人の歴史家が著はれた。「伊勢人は癖事すなり」と云つて、昔は伊勢の人は嘘を吐くと云はれて居つたが、何と云つても伊勢大廟のまします國で、先きには勤王家の北畠親房も此の國に關係があり、徳川時代に於ては本居宣長と云ふ無類の大先生、之と同じ時代に我が此の荒木田女史が現れた。本居先生は「古事記の註釋を書いて日本の人に、立派に正しく日本の起原、日本の國の尊い事を知らせたが、荒木田麗子は南北朝以後の歴史を假名文で書いて名を揚げた。

そして又、當時は現今とは甚だ違い、歴史を作る時に參考すべき立派な書物が中無ない、此の時分には未だ彼の有名な「大日本史」も出來ず、「野史」も出來ない時で有つた。（大日本史は水戸の藩主徳川光圀が諸學者を集めて作らせた歴史で、上は神武天皇様

から下は後小松天皇様の時までの歴史、天皇、皇后を初め其の他人臣あらゆる歴史上の有名人の傳記が主と成つて居る。博く澤山な書物を研究して出来たもので有るから、これほど便利な詳しい確な歴史は無い。冊数は二百三十一冊ある。又「野史」は、二百九十冊ある。後小松天皇様から後、徳川時代の仁孝天皇様の時代までの歴史。周防の人飯田忠彦といふ人が一人で作った。これは彼の「大日本史」を繼ぐ目的で、体裁はすべて之に倣う。これも中中便利な詳しい歴史。此の大日本史と野史と有る時は、神武天皇様から仁孝天皇様までの事が明かに詳しく知れる。但し、此の二書は漢文で書いて有る。

——麗子の時は未だ此の書物が出来て居無かつた。南北朝以前の事はソリヤいろ／＼結構な書物が有るから、文章さへ書ければ先づそれまでの日本の歴史が書ける譯。然るに日本の歴史中誰も一番六つかしくて、立派な歴史の先生でも筆を投げるのは、南北朝から徳川時代までの間、即ち戦國時代とか暗黒時代とか云ふ時代の歴史で有る。——暗黒時代と云ふほど有つて當時の人には學問が無い、學問が無ければ必要な出来事を書き記した書物が甚だ少い。其の上毎日毎晩、日本の國々ドコにもココにも怖しい軍が有つてメ

チャ／＼で有るから、ドコを自當に書いて良いやら紛れて仕舞ふ程の世の中で有つた。然るに此の一番六つかしい間を選んで、これといふ可き立派な参考書も少い時代の歴史を、此の人は女の身で、アレやコレやと取捨斟酌を程良くして、大事洩さず、すら／＼とした文章で簡要を擧げた手並は實に感服の外は無い。又其の編纂の早い事は、明和八年の正月元日から書き初め、同じ二月の十五日に書き上げた。十何巻と云ふ大部の歴史を僅か一箇半月で書き上げたとは、只筆記するばかりでも容易で無いものを。稀なる才筆と云つてよい。此の通り、立派な歴史を早く成功したといふ人は、私の知つて居る所では新井白石先生の藩翰譜と、太安萬侶の古事記で有つた。

此の書、全編十四巻、ソリヤ中には後醍醐天皇様の次に直ぐ北朝を續けて、北畠親房の大嫌な北朝を本として書き、南朝の事は却つて客分と云ふ心で書いて居つて、正統の天子と云ふ方から見れば主客顛倒した事もあり、又書いた事柄は朝廷の話か朝廷の年中行事の儀式の事が多く、間には文は歌の序文の様に見えるほど澤山歌を入れて、他にもつと必要な政事上の事件や戦争の事が澤山あるのに、之を記さず、後陽成天皇様が秀

吉の聚樂邸行幸の事が詳しいが、大切な關原の戦争の始終などを略した様な缺點は無いではないが、これは今我々が其後他に澤山出来た立派な歴史を見た目から評する詞で、此の時代の人に向つて評するのは大きに酷し過るので有る。

其の上、我等は忘れては可けないことは——此の人は婦人では無いが、今日でこそ婦人にも學問が必要だと云はるゝものの、當時は武士の世の中で男の天下で、女には女の道を習はせよ、學問させるのが無益だと云はれた時代では無いが、今日で云へば女の道には學問も這入つて居るが、此の時代には決して這入つては居無かつた。男は讀み書き女は縫針、嫁を貰ふのは炊飯人を貰ふのだ、琴や生花、御茶の湯は極々立派な家の御嬢様の爲すべき事、學問と云へば「女大學」「女今川」手紙が書いて帳附が出来ればそれで十分、普通の人は、先づ「百人一首」位を誦み覺えるのが關の山で有つた時代では無かつたか、昔、女天下の平安時代すらも矢張り女は歌を詠み女文字が書ければよい、漢字は即ち男の文字、男の文字は書かずともよい、ましてや其の男文字ばかりで書いた支那の書物などは知らずともよし讀まざるともよしと云はれた。乃で學者の紫式部も平生は男文

字と云へばそれこそ一と云ふ字も知らぬ様子に謙遜した位で有つて、男の前で學者めいた事を云ふのは、あの負けぬ氣の清少納言一人位のもので有つた。

此の風俗は直ぐと移して徳川時代に當はまる。荒木田麗子は性質甚だ學問が好きで、七八つ頃から書物を見たが、親や兄から叱られて、トウ／＼學校へも遣つて呉れ無かつた。けれども好きな道は廢められぬ。兄さんが讀むのを側から聞き覺えて讀んだと云ふが、此の話とよく似た事が紫式部にも有つたと云はれる。式部が稚い時分に有つた。これも女のクセに學問が中中好で、兄さんの惟規と云ふ人が「史記」といふ支那の歴史を讀んだ時、側から見覺えて讀んだとある、乃で式部の父の藤原爲時、式部が男で有つたならとホト／＼口惜がつたとある。——察する所、麗子の父もこれによく似た思がしたで有らうと思ふ。あ、彼と是とは誠によく似た學問好で、一人は小説を書いて名を残し、一人は歴史を書いて名を残した。

併し麗子は矢張り紫式部の文才を慕うて之を書いた。あの石山寺に詣で、湖水の月を眺めて紫式部を思ひ出した處、元より麗子の作り話では有るが常に紫式部を理想として

居つたことが察せられる、又此の外にはいろいろ小説めいた物を書いたが、みな紫式部を姉とした。

話は一寸横道に外れたが、いい序で有るから此處で言はう。一体私の紹介した此の歴史類は、「古事記」と「正統記」とを除いた外は何が一番の動機で書かれたかと云へば、誰もく紫式部の「源氏物語」に感心して、人たるものは何か此の様なものをと、憧憬たが、中中トテも及びもつかぬ。乃で方針を少しく變へて小説を書かずに歴史の方に手を着けた。それも「源氏物語」の様な小説を書く心得で以て歴史を書いた。「榮花物語」も「大鏡」も皆これで、其の他の鏡類も皆是れで、あの卷々に面白い優美な名を附けた處は疑も無く「源氏」の卷々を真似たもの、「大鏡」のやうにいろいろと人の批評をして居る點は宛ら「源氏物語」にある雨夜の品定（源氏物語に雨夜の晩に、人々の人物容貌を批評して居る）を真似たもの、それ故「今鏡」にも「水鏡」にも乃至はこの「池の藻屑」にも二言目には、紫式部といふ人は立派なものを書きました、私などはトテもくくと云つて、——彼は小説、是は歴史元より方向が違うにも拘はらず、——頻りに辨

護して見たり、甚しきは「今鏡」の尼さんは紫式部に仕へた人だと云つて至極の名譽と思つて居るでは無いか。

三、女學者

然らば此の荒木田麗子は一体どんな生れか、どんな人か、——左に之を麗子自身に話させやう（これは麗子自身が我が經歷を書いて居るのを、分り易く書き換へたもの）私は初の名は隆と申しましたが、のち譯がムいまして麗と改めたのでムいます。……ナニ號でムいますか、號は紫山とか清洛とか申して居ります。字もムいます、字は子奇と申します。

稚い時から何分書物を読むのが好でムいました、處が私の兄弟が皆男でムいますからソレを見倣つて私はトンと女の仕事を嫌ひまして、七歳の時に學校へ行きたいと申しましたら、両親はナニ女の子には無用だと云つて許して呉れませんでした。乃で兄武世が讀みますのを側から聞きかちつてあの「大學」をば所々覺えて暗誦いたしました

よ。こんな風で只今思ひまするとどうも女らしく無かったと見えます。こんななまでに好みまするのを、兄の正富が譽めまして、それから「古今集の序」や「伊勢物語」などを教へて呉れました。未だ手習は致しませんが、此の時假名は覚えて仕舞ました、それから八歳から九歳までいろはの御手習を致しました、又間には「論語」や「孟子」の素讀を教へりました。——物覺がいゝとの事で白田陽山と云ふ藩の儒者が弟子にしようと言はれましたが、又無益だと云つて父が許して呉れませんか、其の話は其の儘になりました。

私は此の時、毎日／＼子供のやうな遊をして居りますのが、ホンとにつまら無く考へまして、兄の武世が毎日／＼御本を懐へ入れて講釋の席へ出て行きますのが子供心にもウラヤマシクテ／＼ホンとに溜りませんでした。乃でこれは何でも假名文のもので讀んで覺えなくちやと考へました、處が兄の息雅は和漢の軍書が大好きで、時折其の話をして呉れまするのが嬉しくて初中終其の側を離れませんでした。

十二歳の時に、女は裁縫だの其の他遊藝など必要だと云はれまして、兄の正富は私に書物に凝りまするのを斷然と制めまして、御琴を習はせました、習へば上手に成つたのかも存じませんが、トンと心が這入りませんでした。

それから十三歳の時に、伯父武世の養女と成つて參りました。養父も書物が好きな處から、勉強には都合がよろしうムいしましたが、強いて學びませんで、私は只軍書本を見てをりました。——處が間も無く養母が亡くなりましたが、其ののちは母とすべき人がムいせん處から、養父はシツカリした下女を置きまして、私には御針を稽古させまして大事に育て、下さいましたが可愛いあまりに、私が少し物覺のよいのを悦んで、十四歳の春からは、イロ／＼詩だの文だの、あの六つかしい「文選」といふ本を教へて下さいました。

歌も養父が好みましたから、私も師匠に就て稽古いたしました。又連歌はすきませんでした。したが親や兄が勧めまするもんですから、少し遣りかけましたら、面白くなつて參りまして、二十一歳の時、兄正紀と上京して或師匠に就て稽古いたしました。

此の時分からどうも身体の工合が悪うムいましたが、丁度養父が亡くなりましたから

歸國して家に居りましたが、草稿は時々京へ送つて直して頂きました。其の後師匠が亡くなられましたからは愈勝となりました。

それから私が最早三十歳を越しまして、明和元年、用事が有つて上京いたしました。それから大阪へ行つて暫らく住居いたしました。此の時は元の連歌の友達とは往來をいたしませんで引籠つて居りました。元の名前では知れると思ひましたから、名を此の時麗と改めました。

それでも矢張り訪ねて來られて一向落付ませんから、今度は攝津の住吉の方へ行つて住ひましたが、此處は静で御客も無くてホントに氣に入りました、又此の時、夜分などには歌を詠んで楽しみました。處が其の年の十二月に、故里の方に出火がムいまして、宅も類焼いたしましたものですから一度故里に歸りました。——程なく新宅も出來上りましたから、又良人と一緒に大阪に行つて住みました、丁度それは明和三年の五月でムいました。

其の後又、國へ歸りました、此の時分から暇さへムいますれば、書物を讀んで楽しみ

したが、宅には書物が少い處から、宮崎文庫(伊勢内宮附屬の圖書館)から「通鑑綱目」や詩の本や歌の本などを借りて來て頻りに讀みました。又裁縫もいたしました。又其の序に和蘭織物の模様を真似て刺繡を致しましたが、面白いと云つて他人様からは所望せられました。又香合の遊も習ひましたが、これも随分面白く感じましたが、外に女連の無い處から始終稽古が出來ませんでした。又其の香包も自分が縫ひました。

又「空穂物語」二十卷は、良人が江戸(今の東京)へ參りました時の土産に買つて參りました。サテ讀んで見ますると中篇文章が六つかしくて一度か二度は中止いたしました。併し此の儘放つて置きますのも不本意と思ひまして丁度明和五年の春良人が大阪へ參りました留守中の暇潰にクリ返し〜讀んで見ましたが段々と解つて參りまして、書き違ひと思ふ所も少々見つかりました。又一所二所章の入れ變つた所も見附けまして、取り變へて讀んで見まするとよく分つた様に思はれました。乃で良人が歸りまして、これらをお話しますると悦ばれて、朱で以て違つた所を改めて呉れました。それから毎晩〜校合をしたり、誤字を改めたりいたしまして、此の書物の目録や系圖も書きました。

此の年から、良人が御前も詩を作って見無いかと云はれましたが、元より力がムいませんで猶豫^{ためら}って居りますと、無理にも勧めますから仕方無しに作って見ました。丁度此の時分に姪^{おひ}の興正^{おきまさ}が京都に學問をして居りましたのを頼みましてあの江村北海先生^{えくらほくかいせんせい}の弟子^{でし}となりましたが、うまく出来ませんので恥しう思ひました。又此の時分から歌の方へ身を入れて和文^{わぶん}も少しづつは書きました。これも皆良人^{ちやうと}から勧められたからでムいます。

此の頃又、「日本紀」を初め彼の「六國史」の類、諸家の紀錄物、公事の書物、有職故實^{じゆくこ}の書物^{ほん}などを見ましたが面白くて熱心に讀みました。

そこで良人は、私に今度は四鏡^{しきやう}に似たものを一つ書いて見無いかと云はれましたから、「池の藻屑」を書きました。それは私が四十歳の時でムいました。これには北海先生の序文^{じゆぶん}を頂きました、次に「月のゆくへ」を書きました。これには野村公臺先生^{のむらこうたい}の序文^{じゆぶん}を頂きました。

○「月のゆくへ」は「今鏡」と「増鏡」との間、高倉天皇様の承安元年から安徳天皇

様の壽永元年まで二代、十二年間の歴史。これは前にもをりく話して居った所の「いや世繼」と云ふものが、昔出来て居ったが、それが何時の間^{いつ}にやら無くなって仕舞ったのを、此の麗子女史^{れいじよ}は書いて補ったので有る。これが出来たので水鏡、大鏡、今鏡、月のゆくへ、増鏡、池の藻屑を見れば、上は神武天皇様から下は後陽成天皇様の慶長八年までの歴史は一通りズツと見ることが出来る。

又小説を書いて見よと云はれますから、「桐の葉」だの「小手卷」などといふのを初めとして、いろいろ書きまして書肆^{しよし}の方へ遣^{つか}しましたが、珍らしくも無い處から其中半分は反古^{ほんこ}になりました。

又「山の井」二十九卷は小説の中に、朝廷の公事を少しづつ書き入れました。「笠舎」^{かさのや}五十四冊——これも國史^{こくし}に倣ったものでムいます。

良人は、世間の交際は嫌で靜に書物を寫すのが好でムいましたから、私も筆を持つのが楽しくムいました。詩は取り分け下手でトテも他人様^{ひとさま}に見せまますのが恥しくて隠して居りましたが、自然と人が知って伊勢の津の藩の儒者奥田三角先生^{おくたさんかく}から七十歳の賀^がの詩

を望まれましたから遣しますと、それから親密になりましたして彼方からは度々良人の方に手紙が有りまして、どうかして御目に懸りたいとのことでムいました。

乃で良人に連れられて先生の里の豊原に参りました。これが縁に成って先生からも御出になりました。

交際が親密になりましたして、津の藩主藤堂様からの御命令で「教婦の辭」といふ文を書いて奉りました。「池の藻屑」「月のゆくへ」「桐の葉」は三角先生が見たいと云はれましたから送りますと、藤堂様も其の姉君武子様も、御隠居様も御覽下さいました。武子様からは「河原物語」といふ御自作を御見せ下さいました。此の序に「空穂物語」の讀合を御願して其の目錄や系圖を送りますと、武子様からは御自筆で少々違つた所を御直し下さいました。中院通茂公の御自筆の本も御貸下さいましたが、私の改めたのと違ひませんでした。又藤堂様の御隠居様の御祝の時に、題を下さいまして詩を御所望になりましたから、藩の書工月仙子の筆老子出關圖に絶句を添へて上りました、其の包紙に正四位下荒木田武遇女と書きましたから御祝の當日、他家の人であり、位階も有るとのこと

とで御一家の大名方の御進物を置く部屋の末に置かれて大に面目を施したと、三角先生からの御音信でムいました。

又、和蘭模様の刺繡を三角先生や北海先生や龍草庵先生などへ進上いたしました。夫々詩を作つて御禮が参りました。藤堂様も御所望とのことで献上いたしました。

月仙子は書を習つて見無いかとのことで手本を書いて呉れましたが、これは真似が出来ませんでした。又良人からは連歌をして見よとのことでムいました。先頃からも云つて呉れる人がムいましたが氣にも留めずに居りましたが、今は當地に連歌する人も無くて、宮崎文庫中に設けて居ります連歌會も潰れるのが残念だとのことで、今度は宗匠の真似をいたしました。

安永六年は私が四十六歳の時でムいましたが、近江の彦根に参りまして龍世華、海老江氏、野村公臺などの先生方を御訪問して、それから京都へ参りました。途中守山の宇野禮泉先生を御訪問申し上げ、京都では北海先生の御宅に永く御厄介になりました。逗留中は相國寺にも参詣して蕉中、維明の二師に御目に懸り天龍寺では弘道師にも面會い

たしました。

それから大阪へ下りまして細谷、頼、橋本、岡兼葎堂、畫工の森蘭齋などといふ人を訪問いたし、夫から須磨明石の方へ参り、法華寺にも参りまするし、三草に行きました。此處には知己がムいます。

序に天橋立へ参らうと思ひましたが、折節雨天續で道が悪いとて非常に留めて呉れる人がムいましたから、癢めました、残念な事をいたしました。

それから大阪に戻り、吉野へ行つて花を見、紀州へ越へて粉河や和歌の浦に参り伊藤蘭遇先生を訪問し、三角先生からことづかつた御手紙を渡しました。

それから大和へ入つて歸國しやうと思ひまして奈良に参り、岡村某といふ家に宿りました。これも兼ての約束で先年から一度来い〜と云はれて居つたので、無理に引き留められました。

ここには連歌する人も澤山有つて、林田といふ家からも招待せられ、参りまして連歌をいたしました。其の時篁某といふ人が私の下手な詩に次韻して發句も添へて呉れ

ました。

連歌が果て、歸りますと、富田、林田の二氏が非常に名残を惜んで旅館まで送つて下さいました。道々猿澤池の月の面白いのを見て、銘々酔に乗じていろ〜滑稽を云合ひまして夜が更けました。

其の翌日は奈良を立ち、笠置の方面から歸りまするので、道の序に豊原に立ち寄りまして三角先生に御目に懸り、其の翌日無事に歸宅いたしました。

此の年の五月、近江から野村公臺先生の添書を以て一人の僧が訪ねて参りまして一宿を乞はれました。良人は厭がりましたが、公臺先生の添書が有るからといふもので宿めました。此の人は大廟の御参詣もそれほど熱心で無くて僅に外宮様が近いからとて其處へ御詣したきり、終夜御話をしたいと云ひました。書物を好きなやうで御座いましたから、日頃から見たく思つてをりました。「北山抄」「西宮記」などの御話をいたしますと貸してやらうと云はれました。又先方には「うつぼ物語」は読み悪いと申ま、かゝ其の目錄や系圖を貸しました。又、私の作った「藤の岩屋」は見たが「桐の葉」を見たいと云

ふから貸して上げました。

さて其の僧が歸りましてから、公臺先生から細々の御手紙が有りました、先日の僧は明照寺の方丈様で庭田一位様の御弟様で入らせられた。有りのまゝでは出あるくことが遠慮が有るとの事で御微行なすつたとのこと。欺いたやうで失禮だがとヨク／＼断を言ふて来て、此の後は御交際を願うと上人様の方からも懇な手紙が來ました。ア、そうで有ったかと、初て驚いて御扱が龜末で有ったのを恥かしく思ひました。其の後「北山抄」は貸して下さいまして、見て仕舞つた後は宮崎文庫へ納めて呉れとの事で、良人は之を寫してそして文庫へ納めました。

私が五十歳になりました年、連歌仲間の人々が賀筵を開かうじや無いかと申しますから、年始に私が蘭竹梅を書いて側に詩を書いて國々に送り、諸大家先生に詩や歌を請ひました。賀筵は三月十日の誕生日に開くことに定めましたが、二月の末或一人の人から發句を送られたばかりで何處からも返事が参りませんでした。三月九日の朝から晩まで京、大阪、彦根、津、豊原からも詩だの歌だの、武子様からは歌、藤堂様からは詩を

下さいました。其の御禮として末の松山の松の枝で作つた筆を武子様へ進上したが、直ぐ御歌が参りました。

此の時分、遊仙窟を真似て書いた物語をば、「桃源」と名づけましたが、藤堂の御隠居様は御覽になつて和文のものには似付かぬ名だと仰せられて「藤の岩屋」と御付け下さいました。

之と趣向がヨク似た「野中の清水」は本居宣長さんが何處かで見たと見えまして、欠點を批評して返して参りました。乃で答辨をやりました。これから後三角先生の御取りつきで、再三の推問答が有りますが、ドウシテも本居さんの説に賛成をいたしませんでした。

安永六年連歌仲間の人、久保倉弘典様が御連になつて駿河國青島村の青島某様の母、娘の俊と云ふ人が太神宮様に御参詣したと云つて御出になりました。歌が好きで私に見てよい書物を尋ねまして弘典様に逗留中、歌の添削を頼に参りました。其の母娘が此處から京都へ出ました。名残を惜んで歌を送りますと返歌がありました。又先年播磨や

大和邊を巡った時に書きました「初午の紀文」を遣りますと、之を案内に播磨大和巡をして歸國いたしました。其の後は絶えず文通をいたしました。

天明二年の春（麗子年五十一歳）又京、播磨を巡りました。京都では又元の草廬様の家に逗留いたしました。歸りに兵庫で或歌人が無理に引留めましたから四日ばかり逗留し、其の邊の名所舊跡を尋ね、それから大阪へ來、大和路に這入って初瀬の花盛に立ち寄ったが、其處で奥州白河侯の家臣の某といふ人に面會し、土産にするからと無理に頼まれて短冊を書いて送りました。

乳熊の悟心禪師からも音信が有って詩や歌を呉れました。私からも詩や歌の返事をしたが、一晚招待せられて其の庵へ行つて宿りましたが觀音様を信心せよと言つて畫像を呉れました。

私も今は五十歳を過ぎましたから養子を貰つて、その躰に忙しうゝいましたから、何事も棄てましたが、連歌は良人が好で仲間も有るから捨てずに老後の樂といたしました。連歌を作ることは昔からの事で、世間にも知れて居る處から、遠國からもワザく訪ね

て來る人が有りまして靜に暮らすことが出來ません、此の外詩や歌や文を頼に參る人が多く御座います。併し何分書が下手な處から心が進みませんが、世間の人は許しませず、扇子だの短冊などを持て來る人が澤山あります。そこで毎日と云ふては困りますので幾日と日を定めて毎月二十五日に書くこととし、人にも斯う申しますと毎月二十二日頃から集つて參りまして机の上に積む位でゝいます。かうなつてはトテも一日には書き切れませんが翌日にも亘りました、——これも春夏の間はそれほど無いが八月から十二月までが澤山になります。これは旅立する人が國へ土産にするんだそつでゝいます。

寛政元年は私は五十八歳でゝいます、其の頃は、京都の花下宗匠は先きの昌桂先生の御子の昌逸様の代になりましたが、先方からは連歌の田舎宗匠を許すから上京するやうにと御叮嚀な御手紙が參りましたが、今は斯う年を取つては旅行も出來ませず、又連歌も古臭くなつて只今の時勢に遇ひません、元來は只自分の樂にしたばかりで宗匠にならうのと云ふやうな力もなく、又望もゝいませんので、ツマラナイ名が世間に聞えまするのも有難くもゝいませんから、其の御深切は深く謝して御斷いたしました。

寛政三年七月御江戸の將軍家の御連歌師瀬川昌徳様が伊勢へ御出になりましたして御訪ね下さいましたから、文庫の會へも御招待しました。御師（矢張り神主ノコト）の許に暫時御逗留なさいまして内宮様（伊勢大神宮）へも御參詣なすつたりして、月末には私（わたし）の家にも御出になつて一晩御宿りになりました。連歌の御話を致しましたが、いろいろ打明けて惜氣もなく其の心得を御話下さいました。

其の後良人が煩ひまして幾程も無く死去りましたから、今は連歌も癢す所でムいしたが、棄てずに遣れとの遺言でムいましたから、續けまして子の佳包にも御文庫の會や家の月次會（毎月催す會）にも勸めて出しました。

享保元年は丁度七十歳になりました、佳包は古稀七十歳の祝をして呉れましたが、私は又他人様に御迷惑をかけてはと存じまして、祝の詩歌は他所へ頼みませず、極々手輕に御祝を致しまして、親類や連歌仲間や、歌を稽古する人からばかりに致しました。

斯様に年を取りまして、筆を持つのも大儀で御座いましたから、明くる二年からは何も書かぬと決心いたそうかとも存じましたが、間には無據い事も御座いますので、それ

までには致しません、成る可くは斷ることに致しました、短冊など斷つて、強て乞はれますと、舊書いて有つたのを遣りました。——これも有るうちは宜う御座いますが、段々少くなつて參りますので……。

四、荒木田女史は賢婦人

皆様如何である。

此の人はあのやうな時代に生れて、あの様にして勉強した。そしてあのやうに偉くなつて、連歌も出來た、詩も出來た、歌も出來た、繪も書けた、歴史に明るい、文も書ける、そして交際した人は、皆此の時代の大學者で有つた。どちらかと云へば漢學者の方と交はつて、國學者とは交際をし無かつた。——當時は伊勢に最前云つた本居宣長先生もあり荒木田久老と云ふ伊勢神宮の神官で有る國學者も居つて、盛に國學を唱へ、古史古歌の道を論じたから同じ道とて行いて話もし、質問もすべき筈であるのに、決してそんな事が無かつたのみならず、何か本居先生と議論を初めて、どうしても其の説に従は無かつ

た。

御友達は重に男で、しかも漢學者、議論を初めたら決して負けては置かず、京都へ行ったり、播磨へ行ったり、紀州へ行ったり、大和へ行ったり、女の足で交通不便な此の時代に、百里の道を股に狭んで歩いて居る、——随分シツカリした婦人と見える。此の様な人こそイヅレ家庭の仕事所謂女の道と来ては、それこそソツチ除けだらうと誰でも思ふが、決してくそうでは無い、裁縫も上手で、刺繻も上手で、香も焼いた、琴も弾じた、夫如松にもよく仕へて仲が善かつた事は——それとは云はぬが此の話の中に見えて居る、どちらも學問好の人人として、夫婦仲よく机を並べて樂み乍ら勉強した姿までがアリく見える。連歌は後には廢めたいと思つたらしいが、夫が好からやうと見えぬ。處が夫が亡くなつて、廢めやうかと思つたが、遺言に續いてやるやうにと言はれたから、やめずにやうと云つて居る。三年父の道を改めざるは孝行だ」と孔子も云つたが、孔子の道を學んだ漢學仕込の此の婦人は、よく夫の道をいつくまでも改め無かつた。平生からの貞女で無ければ斯うは出来ぬ。

其の外、自分の信じた事は決して動かぬが、エテヒナ此のやうな人に有り勝な人を人ともせぬ氣象かと思れば中中以てそうでは無く、やさしい婦人と云ふ事が、話の所々にホノメて居る。又母らしい處も有つて、子供の躰の爲に、閑暇が無いから、いろいろの道樂は皆廢したと云つて居る、——稀なる賢婦人と謂ふ可しで有る。

此の人は、伊勢山田の神官釜石權之進といふ人の娘で、同じ所の神官荒木田武遇の許へ養女に行き、後に御師と云つて神官としてはあまり格の高くもない慶徳三郎太夫字は如松といふ人に嫁して、夫と俱に學問をして樂んだ。

此の女史は、中御門天皇様（將軍徳川吉宗時代）の享保十七年子の二月に生れて、光格天皇様（將軍徳川家齊時代）の文化三年正月に亡くなった。年は七十五歳で有つた。お慕は伊勢國山田の浦口町虚空藏谷と云ふ處に在るが、辭世の發句も刻まれて居る、

松や昔語らば夜半の夢の友、

身や胡蝶花になれしも一昔

此の人の家は、今も尙山田の八日市場と云ふ處に有ると云ふが、序有らば訪ねて見

日本文學物語 歴史の部 大尾

吾妻鏡の話

一、山木の夜嵐

吾妻鏡の話

人皇第八十代、高倉天皇の治承四年四月九日、
 入道源三位頼政、夜に入つて、其の子伊豆守仲綱等を引き連れて、密かに後白河法皇
 様の第二の皇子、以仁王の御所、高倉の御殿に参り、さて謹んで、前右兵衛佐源頼
 朝以下の源氏に仰せて、平家御追討あらせられます様と、いろく御勸め申上げた。
 此の頼政は、日頃から、平清盛を討ち滅したく思つて、かねぐ其の用意をして居る
 が、自分一人の計畧では、到底目的が達せられぬと考へたから、今夜参つて、御勸め申
 し上げたのである。
 然るに、直ちに、御聞届が有つて、源氏を募る所の令旨を下された。——乃で陸奥十
 郎義盛、この人は源爲義の末子で、即ち頼朝の叔父で有るが、幸ひ只今在京して居る所

から、此の令旨を頂戴して關東に下り、先づ源頼朝に觸れ知らせ、それより又、諸國の源氏に觸れ知らすべしと云ふ御掟を承はつた。

乃で、義盛、新に八條院藏人の職に補せられ、名も行家と改めて、其の翌十日の夜半頃に、籐の笈を脊に負ひ、柿の衣に身をやつし、自分の住國紀伊の新宮で、常日頃見習つて置いた山伏の姿に様を變へ、大切な令旨は、錦の袋に入れまゐらせて、シツカと首に懸け、心の底に希望を抱いて、足もと軽く、關東へと下つて行た。

其の月の二十七日、高倉宮の令旨が、先づ第一に、伊豆國は北條時政の館に居る源頼朝卿の手許に着いた。——云ふまでも無く、藏人源行家が、山阪はるく持つて參つた。

そこで頼朝卿、早速新しい衣服に改め、先づ遙かに、京都は男山八幡様の方を伏し拜み、さて謹んで、御令旨を拜見した。

行家は、又是れより、甲斐や信濃の國に居る源氏の人人に此の趣を觸れ知らせる爲め直ぐと北條を發つて行た。

山 木 の 夜 嵐

そもく、此の頼朝は、彼の平治の亂の結果、二條天皇の永曆元年三月十一日、十一歳で當國に流されてから以來、年月二十年の春秋を送り、今年は愁の中に三十四歳になつたので有る。——然るに、此の頃、平清盛恣に天下を管領し、或は近臣を誅罰し、剩へ後白河法皇様をば、勿体なくも鳥羽の離宮に遷し奉つて、頻りに叡慮を惱まし奉る。

此の時に方つて、斯様な令旨を頂戴したのであるから、直ぐに義兵を擧げやうと云ふことに成つた。——これは實に、天の興ふるを取ると云ふ工合で、時節到來と云ふべきで有らう。

爰に又、當國の豪傑に、北條四郎時政と云ふ人が有る。これは上野介平直方が五代の孫で、先きに長女の政子を以て、頼朝に妻はした、忠節無二の人で有る。因つて、頼朝、先づ此の人を召んで、俱々令旨を拜見した。

爰に伊豆國、山木の郷に、山木判官平兼隆と云ふ者が有る初めは檢非違使とい

吾 妻 鏡 の 話

ふ役人で、和泉判官と云つたが、何か大きな罪が有つて、父親の和泉守關信兼から訴へて出たので、此の伊豆國山木の郷に流されたが、年月が経つまゝに、此の處の目代となり、太政大臣平清盛の一族と云ふところから、其の威を籍つて、此の田舎に勢力を得て、今は飛ぶ鳥を落して居る。されば頼朝に取つては、當の敵で有る上に、又一つ私上の恨が有るから、軍神への血祭に、先づ此の兼隆を亡ぼすがよからうと云ふことゝ成つた。

併し、兼隆の宿所は、最も要害のよい地で、後から行つても、前から行つても、容易に人馬の通はれる處で無い。どうかして、其の地の、詳しい地圖を欲しいと云つて、頼朝は其の右筆(書記官のこと)藤原邦通を密かに遣つて、地圖を書かせることになつた。此の邦通は、元來京都の人で有るが、流浪して伊豆國に來り、藤九郎盛長の世話で、頼朝の右筆と成つた。そこで、邦通つてを求めて、山木判官兼隆の館に行つた。丁度、兼隆は酒宴最中で有つた。元より邦通は、世才に長じ、舞が上手で繪も書けると云ふ風流な人で有るから、直ぐ兼隆の氣に入つて、數日間此處に逗留した。其の間に、其の地の

山川村里の様子に至るまで、詳しく繪圖に曳くことが出来た。

「サア、これさへ出来れば、もう大丈夫」と、いい加減にして北條へ歸つて來て、頼朝に献上した。

そこで、頼朝、北條時政を別室に召んで、只二人が、此の地圖を中に置いて、軍議を凝らすに、討入る道筋、軍勢の進退、要所要所の陣の取り方など、一目瞭然、宛ら其の場に行つた様で有つた。

八月六日、今日は源頼朝、藤原邦通、住吉昌長等を御前に召んで、戦争開始の吉日をトはせ、来る十七日の曉方を以て、兼隆誅伐の日と定めた。乃で、工藤の介茂光、土肥の次郎實平、岡崎の四郎義實、宇佐美の三郎助茂、天野の藤内遠景、佐々木の四郎盛綱、加藤次景廉等の様な、頼朝の命令を重んじ、我が命を輕んじて、頼朝を助けると云ふ勇士をば、一人一人、別室に召んで、此度の企に就いて、密々の御話があり、此の事件、未だ表向發表はせぬが、只、其方を信用して居るから、先づ以て告げるので有ると、銘々に叮嚀な詞をかけて頼まれた。——斯う特別の思召を受けた人人、皆大いによろこんで、

此の度の軍には、一生懸命に働かうと所存をきめた。——これから、家を起さうと思ふについて、家人をして、一致共同せしめやうと云ふ考で有る。併し眞實の大事に至つては北條時政の外には知る者が無かつた。

さて、かれこれするうち、千載一遇の十六日が來た。——昨日から降り續いた雨が終日息まぬ。

先づ、住吉昌長（神官）に仰せて、明日の合戦、無難に成功するやうにと祈らせた。處が、佐々木の定綱、盛綱兄弟は、去る十三日、自分の甲冑を取りに、相模國に立ち歸り、今日參る筈の處が、何時に成つても歸つて來ない。そうかうする中日が暮れた——これでは軍勢が足りないので、明朝兼隆を征伐することが六つかしい。それかと云うて、十八日は、頼朝が幼少の時から、觀音様を祭つて殺生せずに、慎む日で有るから、今更犯すことは相ならぬ。さりとて十九日となれば、今度の計畫露顯すること疑が無い。其の上、澁谷庄司重國は平家に仕へて、佐々木とは仲が善い。一旦の志に感じて、大事を洩したのが殘念なと頼朝甚だ心配した。

山 木 の 夜 嵐

明くれば十七日、今日は昨日と打つて變つて、快く晴れた。處へ正午過ぎ、佐々木の太郎定綱、同じく次郎經高、同じく三郎盛綱、同じく四郎高綱、兄弟四人が大急ぎで遣つて來た。

定綱と經高とは疲馬に乗つて居り、盛綱、高綱は歩立で有る。

頼朝之を一目見て、兩眼に感涙を浮べられ「やれ、汝等が遅かつたばかりに、今朝は軍は出來なんだ。太う殘念で有ったぞ」と仰せられた。

「左様で御座らうとは存じましたが、折悪く、洪水が出て、川々は橋が落ち、渡般も出ないと云ふ騒ぎで、致方なく遅なりました」と御詫した。

今日も亦日が暮れた。

「軍は、明日に延すべきじや無い。サア銘々早く、今夜の中に、山木に赴いて勝負を決せよ。今度の合戦、まこと一生涯の運定めじやほかに、皆々忠勤を勵んで呉れ。

又、合戦が始つたら、先づ一番に火を懸けよ。乃公は此處から火の手の揚るを見物しやうぞ。皆々しつかり頼むぞ」と仰せられた。

承つて勇士の銘々、甲冑で皆立ち上つた。

此の時、北條時政「今日は、彌悪、三島明神様の御縁日で、只今丁度下向時分、牛鋏の大路を廻らうもんなら、ソレコソ往來の者に咎められう。イツンの事には、蛭島の抜け道は如何で御座らう」と伺つた。

「それも尤だが、併し事の始に方つて、裏道を通るのも宜しくない。其上、蛭島は騎馬では難儀致す有らう。ヤツバリ本街道に限るぞ」と仰せられた。

住吉の小太夫昌長は、御祈禱の爲めにとて、これも一緒に遣はされた。腹巻を着けて出立した。

佐々木の盛綱と加藤次景康とは、留守せよとのことで、止つた。

そこで、銘々勇み進んで出立した。其の道筋は、蘇木を北へ、肥田原と云ふ所に着いた時、北條時政馬を扣へ、定綱を召んで申すは「時に、兼隆の後見に、堤權守信遠と云ふ奴が、山木の北の方に住んで居るぞ。彼奴中中の勇士じやほどもに、此の時一緒に仕留めずば、後日に至つて面倒いだらう。御邊兄弟は、其の信遠を暗討せよ。案内者を付

けて進じやうほどもに」。

定綱等承知して、別軍と成つた。本軍は、これより牛鋏を東へ路を取つた。

定綱兄弟程なく、信遠の家の前まで駆け着けた。乃で定綱、高綱兄弟は、時政から附けられた案内者源藤太と云ふ雑色(小使)を連れて、信遠が宅の後に廻り、經高は前門に迫つて矢を發つた。——この矢こそは、源氏が平氏追討の爲めに發つた一番初めの矢で有つた。時は八月の十七日、月は眞晝のやうに明るかつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、

(下略)

二、富士川の水鳥

治承四年十月廿日、

平家の方では、小松少將維盛卿、數萬騎の大勢を率ゐて、頼朝卿追討の爲めに下向し、今日は、駿河國手越驛に到着した。

乃で頼朝卿も鎌倉を發つて、駿河をさして出發し、同國賀島と云ふ所に至つて陳を取つた。

平家方には、左少將維盛、薩摩守忠度、三河守知度等は、富士川の西岸に陣を据ゑ、軍は明日と定つた。其の夜半、源氏の方には、武田の太郎信義、夜襲を企て、夜中潜に平家の陣の後に廻つた。

處が、折しも富士沼に下りて居た數千の水鳥、一時にバツと飛び立った。何がさて、其の羽音が、恰も軍馬の寄せるがやうな音で有る。

之に驚いた平家の人人「ソリヤ、敵が寄せた」と、我一勝に逃腰と成つた。——そこへ持つて行て、上總介平忠清等の申すは「聞けば、東國悉く頼朝卿に歸順したとやら、斯うなつては、我等なまじひ手向でもしやうもんなら、それこそ巻討に會うて、一人も助かるまいぞ。いっその事、早く歸洛して、別に計略を廻しては如何で御座る」と云ひ出した。

臆病神の附いた維盛を初め、何れも、此の議尤じやと賛成し、夜明も待たず、都を指して逃げ上つた。

三、黄瀬川の嬉し涙

源氏方には、平維盛を追ひ討して、都までもと馬を速めたが、常陸介常胤、三浦の義澄、上總介廣常等口を揃へて、「いや、常陸國には、佐竹の太郎義政、同じく冠者秀義等は、數百の勢を備へて居て、未だに歸服致さず、中にも秀義が父の四郎隆義は、只今平家に從いて京都に居ります。その外、御領内には仰に從はぬ輩、まだ多く御座る程に、マア、東國をしつかり御平げに成つた上に」と御諫した。

夫れ故、源頼朝卿も一先づ黄瀬川に陣を据ゑた。

其處へ、或日參られたのが、年齢の頃は、二十二三の若侍「鎌倉殿（頼朝卿のこと）の御陣屋は、此處で御座るか、御遇ひ申上げたい」と案内を請うた。土肥の實平、土屋の宗遠、岡崎の義實等は取次に出て見たが、一向見知らぬ人で有る。

「さて誰で御座らうの」との評判で、容易に取次がずに時を遷した。

それを頼朝卿聞しめされて「年齢恰好から、様子から考へれば、これは奥州の九郎で有らうぞ。試に對面して見やうぞ」と申される。

そこで、實平、彼の侍を奥へ請じたら、果して義經主で有つた。

「よく来て呉れた」と云つて、早速、御前に案内せられて、互に昔を語り合つて、末は懐舊の涙を催うされたが、やゝ有つて頼朝卿「お、思ひ出した事には、昔白河天皇様の御時、永保三年九月で有つたとやら、曾祖父様陸奥守源朝臣（義家のこと）奥州に於て、清原武衡、家衡と合戦の御砌、御弟左兵衛尉義光様には、京都に於て仕官して居られたが、義家様の軍難儀と聞かれ、朝廷警衛の職を辭退し、弦袋を殿上に懸けて置いて、早速奥州に下向あつて、兄君の軍に加はつた故、強敵忽ち亡びたと聞いて有るが今日の來臨、之に似寄つて甚う目出度い事じや」と、御喜悅あつた。

そも、此の義経は、去ぬる平治の大亂に、未だ襤褸の中にして、父に死別れ、繼父に當る一條大藏卿長成に養育せられたが、後出家する爲め、鞍馬に登つたが、成人するまゝに、深く源氏の滅亡を嘆き、いつかは平家を亡して、會稽の恥を雪がうと、自身元服して源九郎義經と名乗り、秀衡の威勢を恃んで奥州に下り、其處に久しく居られたが、此の度、兄の頼朝卿、宿望を遂げんが爲めに、軍を起したと遙に聞いて、ジツとしては居られず、直様上つて來やうとした、秀衡は「マア、ジツと様子を御覽あれ」

と強ひて留めたので、竊に館を抜け出でて上つて來た、秀衡も今は留める事もならず、然らば、此の兩人を御家來にと云つて、佐藤繼信、同じく忠信兄弟の勇士を供させた。

四、一羽の鴛鴦

爰に、木曾の冠者源義仲といふは、頼朝卿とは、元より従兄弟同士である。頼朝が以仁王様の令旨を奉じて兵を擧げたと聞いて、これも信濃に兵を擧げて遙に頼朝に應じた。頼朝は、元より猜疑心の深い人で有る。義仲の起るのを見て、直ぐと疑ひの心が出た。乃で義仲は長男志水の冠者義高を鎌倉に遣して、頼朝の娘大姫君と結婚させ、そして永く人質として、兩方の疑を解くこととした。

義仲、義高を鎌倉に遣はす時に、義高に申し聞かせた。此の度、お前の鎌倉行は、随分重荷である。善く頼朝に仕へて疎んせられる様な事にならない様に仕無ければならぬ。よろしいか」と云つて聞かせて、同年輩だと云ふ事で、海野小太郎幸氏と云ふ侍を、義高に從けて遣はした。——そこで、頼朝卿も早速、我が娘を義高に妻はせた。

處が、其の後、義仲は勅勘の身となり、義経、範頼をして誅せしめたので、聲の義高

も、これから頼朝に心を置かれるやうになつた。

頼朝大いに考へた末、娘が可愛さうであるが、ここで、義高を殺して仕舞ふに限ると考へて、腹心の家來に之を申し含めた。

どうして聞いたか、娘の侍女どもが、此の秘密を聞き込んで「斯様くの噂が御座ります」と姫君に囁いたので、姫君大きに驚き、夫が大事か、親が大事か、どうしても夫を助けなければならぬとの考で、早速、此の旨を夫義高に告げ知らせた。

「さうか」といふもので、一先づ此處を逃げることになり、其の夜の曉方に、女の姿に身をやつし、用に托して侍女どもの中に雜つて、邸を抜け出で逐電した。

最前の海野の小太郎幸氏、日頃は義高の左右に居つて、片時片時も離れる事が無く、義高が双六を好む處から、日夜其の相手をして居つたので有る。乃で義高が逃げた後は、成るべく義高を遠く落さうと云ふ考から、幸氏早速義高の寢室に這入つて、蒲團を被り、義高が寢て居る様にし、今朝は又、朝寢して遅く起きた様子にして、義高の居間に居つていつもの如く、双六を打つて居るかのやうに見せかけた。幸にも誰も容易に知らなんだ。

其の日の夕方「ヤア義高は居ないぞ」と云ふ騒ぎと成つた。頼朝卿大に怒つて、早速海野の幸氏を召捕らせたが、逃げた義高が戻つて来る事でも無いので、「見付かり次第、打つて取れ」との事で、堀の藤次親家などと云ふ若武者どもを、八方へ分けて追懸けさせた。——可愛さうなは姫君で有る。心配で、起つても坐つても居られない。

それから、五日目堀の藤次親家の家來藤内光澄といふ男が、武藏國の入間川で、うまく義高に追ひついてとうとう首にして歸つて來た。

姫には、内證にと、秘して居たが、いつかは知れて、大きに嘆き、可愛さうに、食物も食へずに慕ひ悲んだ。母親の政子、大いに姫に同情して、これも貰ひ泣きをしたので有つた。邸中の男も女も、これには太く心配して、誰とても笑顔はしなかつた。

姫は此の後、嘆きのあまりに、とうとう病の床に就いて、日に／＼衰へて行くばかりで有るので、政子は大きに怒り「たとへ、主君の命令にもせよ。これらの事は、内々一寸、姫君に御知らせするのが道で有る。斷りも無く、追討するとは不届である」との事で、頼朝に勸めて、其の堀の藤次の家來を斬罪にして僅に姫の心を慰めるやうな事もし

た。

五、鶴岡の舞姫

一三八

文治二年四月八日、

今日は、卯月八日と云つて、釋迦牟尼如來の御誕生日で有るので、賴朝卿、御臺所政子の方を連れて、鶴岡八幡宮に參詣した。

此の序に、源義經の妾靜御前を召出して舞を舞はせやうとした。初め、義經は吉野を落ちたきり、今に踪跡を暗まして居るから、賴朝卿心配でならぬ、其の在所を聞き質さんが爲めに、靜母子をわざと京都から召んだので有る。

靜は元來京都で鳴らした白拍子（今の藝妓）で、當時鎌倉武士の武骨な眼には誠にハイカラな美人で有るから、大きに評判に成つたのである。そこで、舞を舞つて見せよとは、早くからの所望で有つたが、今日も病氣じやと云つて參上せぬ。又私の身は、元より卑しい者で有るから、とやかく御違背申すべきでは御座いませぬが、何を申すも伊豫守様（義經のこと）の妾と有らう者が、大勢の人中へ出て、耻を曝すは忍び無い」と云

つて承知せぬ。

「併し、靜は天下無双の舞の名人、折角はるく下向して、聞けば、近日歸京する筈、其の藝を一見せぬのが残念じや」と、政子は頻りに所望して無理に連れて來させて「只、八幡様の御馳走として、是非に一曲を」と頼まれる。されど靜は「近頃伊豫守様に別れて以來、毎日泣いて居ります。舞どころでは御座いませぬ」と、今になつても辭退する。

が、あまりの勸めに、辭み兼ねて舞ふ事に成つた。工藤祐經は、元來は京都に居つて、平重盛に仕へた男で、性質は割間めいた男で有るから鼓を打ち、畠山の重忠は銅拍子を打つことと成つた。そこで、靜は舞ひ初めて、うつくしい聲で歌をうたふた。其の歌は、

よしの山峰の白雪ふみわけて

入りにし人のあとぞこひしき

いよ／＼ますます、可愛らしい聲を、一段とはり上げて、

一三九

しづやしづの緒環くりかへし

昔を今になすよしもがな

と、先づ御岡の八幡始つてからの、いい聲で歌ひ且つ舞つたので有る。有りとあらゆる人々あつと斗りに賞讃した。

時に、頼朝卿、御簾の中より、聲を立て、「此の八幡様の御寶前に於て舞ふからは、よろしく關東の萬歳をこそ祝すべきで有る。それに何ぞや、場所も憚らず、謀反人の義經を慕つて、曲も有らうに、別離の曲を歌ふなどは、以ての外的事で有る」と叱られた。

其の時、政子「申し、我が殿、さな宣ひそ。昔、君は流人と成つて、あの伊豆國におはした時、妾には此の上も無い御情を御かけ下さいましたが、父の同政は、外聞を憚つて、一旦我等の仲を割きました。然るに、妾は、なほ君を慕ひまゝにさせて、夜にまぎれて家を抜け出で、大雨を冒してまでも君の處へ参りました。

又、石橋山の合戦の時、忘れも致しませぬ、一人伊豆山の権現 　　つて居て、君の御

様子一向承ることが出来ませず、泣いてばかり居りました。

それを思へば、今日静の心も同じ事、今もし静が、義經殿多年の情を忘れて仕舞ひ、慕ふ素振も無かつたなら、それこそ貞女では御座いますまい。心の思ひが、思はず外に露はれて、今の歌になつた處、中中風流な事で御座いませう。此の度の事は、平に御免下さるやう」と宥められた。

頼朝卿も成程と感じて、時節に合つた卵花重の衣裳を取つて静に引出物とした。

其の年閏七月二十九日、静は男の子を鎌倉で産んだ。——疑ひも無く、伊豫守源義經の子供である。先頃より上京せしめる筈で有つたが、子供を産んだ上の事として、今まで上京を見合はさしめたので有る。父は關東に背いて逐電した其の子であるから、若しも女の子ならば、早く母に賜ふ可く、男であつたら、今は方角も知らぬ赤子じやが、後日の祟がおそろしい。いっそのこと、未熟の時分に殺して仕舞ふのが上分別と、話かましまり、今日、安達の新三郎に「其の赤子は由比濱邊へ棄てよ」と命じた。

命を受けて、新三郎、赤子受取の爲めに、静が宿所に行き向うた。——静はなか／＼

渡さない、奪はれてはと、焼野の雉、衣を被って抱き臥し、只おい／＼と泣くのみで、いくら云ひ聞かせても聞き入れ無い。押問答も數刻に及んだので、安達の新三郎大きに腹を立て、それは怖い顔をして、大きな聲で吐鳴り出した。本人よりも母親の磯の禪師、取り分け怖れて、無理やりに赤子を奪って使に渡した。——女は、流石に女同士、政子聞いて大きに憐み、棄子の事は、いろ／＼仲裁せられたが、この事ばかりは聞かれなかつた。

其の九月には、静母子は暇を貰つて、秋風の立つと俱に京都に向つて發足した。——政子は、元よりのこと、殊に同情の念に堪へられ無いのが、最中病に臥して居る頼朝の姫君である。今の静は夫には生きて別れ、遣れ形見の生みの子は、見す／＼殺されて仕舞つた身の、何たのしみ有つて、京都に歸る。見る影も無く、親子二人が、シホ／＼として出立する。義高といふ人には、生別した姫君の心には、今の静の身の上、決して他人事とは思はれぬ。自分で無いかと思ふばかりに同情した。そこでいろ／＼と心を籠めた贈物をしたので有つた。

六、有りの儘を寫した吾妻鏡

右は、即ち「吾妻鏡」の數例で有る。これで「吾妻鏡」といふ書物は、どんなことを書いて居るかと云ふことが、略々知れるで有らう。尤も「吾妻鏡」は、鎌倉幕府の役人が、幕府の命令を受けて、毎日／＼其の日／＼の出來事を書き附けた、日記風の歴史で有るから、初から終まで、皆悉く面白い事ばかりを書いて無い。幕府の事業、又は鎌倉の家臣の間に起つた事は、大きい事、小さい事、何に限らず書き附けてある。——大きい事は、頼朝が天下を取るについての策略から始まり、小さい事は、鶴岡八幡宮の御殿の天井で、夜分鼠があばれた事まで、又、誰やらが、道を歩いて居るうち、頭に鳥の糞をしかけられた事まで書いて居る。

されば、「吾妻鏡」が書いて居る年數は、彼の高倉天皇様の治承四年四月（紀元一八四〇年、但し治承四年四月二十二日は、安徳天皇様が高倉天皇様から御禪を受けて御即位あらせられた）源頼朝が、以仁王の令旨を奉じて、伊豆の北條から兵を起して、義兵を擧げた事から書き初め、次で驕る平氏を追討した戦略、計畧、次に幕府を鎌倉に開いて

諸國の總追捕使となり、征夷大將軍となつた事、其の後、源氏が三代で亡びて北條氏が京都から、藤原頼經、頼嗣、次には宗尊親王、惟康親王様と云ふ、將軍としては、誠に立派な方であるが、極めて御若い、未だ西も東も御分りにならぬ赤子であらせられる方をば申し下して、れいしくも征夷大將軍で候ふのと云つて、表向では非常に崇め込み、裏では天下の權利は、皆自分の家に握りこめて、時政、義時、泰時、經時、時頼、長時、政村、次にあの有名な時宗の代になつてから六年目、即ち人皇第百二十九代龜山天皇様の文永三年七月（紀元一九二六年）まで、八十七年間に於ける、鎌倉幕府の出來事を書いた、日記風の鎌倉幕府の歴史である。

乃で、前々に御話して來た「大鏡」を初め、イロ／＼の「鏡」類の歴史とは、丸きり性質が違つて居る。故に、例の尼さんなどが、御寺で話したといふ風では無く、イキナリ「治承四年四月九日、入道源三位頼政は」と、此の話の初めに書いて居る通りの事から始つて居る。

併し、「吾妻鏡」と云つて、「鏡」と名づけて居るのを見れば、本書の筆者は、ヤハリ「大

鏡」や「増鏡」のやうに面白くと考へて居つたことが知れる。そこで、漢文で有るが（但し、文法正しい漢文では無く）「四鏡」の話の次に附けて話すのが可からうと思つて斯く最後に附けたので有る。

「吾妻」とは即ち「東」といふ、古い日本語である——皆様は、此の話が御存じで有らう。

昔、景行天皇様の御時、東國に謀叛人が起つたので、皇子倭建命様が、仰せ承つて、妃殿下弟橋姫命を連れて御征伐に御出になつたが、相模國三浦郡にある走水の海を渡られた時、海の神が浪を立て、皇子の御舟が今にも覆らうとした。其の時、御供の弟橋姫命「此の儘ならば、とても御舟が助からぬ。ここで命様が、若しもの事が有つたなら、それこそ國家の一大事、女ながらも御國の爲め、命の爲めに、私の命を龍神に差し上げて、命様の御身の代りになりませう。……………それにしても、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の
火中にたちて訪ひし君はも

あの、夷等に焼かれた時、私の命を氣づかつて、尋ねて下された命様と、御別するの、悲しい」と御歌をよんで、其の儘、海に這入れた。
其の功德によつて、今の今まで、荒れて居った大浪が忽ち静り、命の御舟が安々と御着になつた。

それから、命様は、追々と御征伐あそばして、大功を奏し、凱旋あそばされる時足柄山を御越になつた、峠に立つて、東の方を御覽になると、あの弟橘姫命様と、難船せられた海も見ゆる、そこで、

「あの海こそは、我が最愛なる橘姫が、操固くも身代りに立つて呉れた場所が無い。可愛き吾妻はや、戀しき吾妻はや」と、今日の詞で申せば、「吾が妻よ」と仰せられた。——それから、東國をば「吾妻く」と云ふのじやと申すことです。鎌倉は即ち東國であるから、東の國の歴史と云ふ心で、鎌倉幕府の此の歴史を、「あづま鏡」と附けて、「吾妻鏡」と書いたので有る。

然るに、此の「吾妻鏡」は、支那の學問が流行する徳川時代に、初めて、幕府から出版

せられたが、其の時、幕府の學者林道春などといふ人々が、「吾妻鏡」をば、「東鑑」と書きかへた。それから「東鑑」と多く書いた。

斯く「東鑑」と書きかへた理由は、即ち皆支那の眞似で、支那にも昔から、歴史は、國を治める手本、身を修める手本として、歴史をば「何鑑く」と云つて、唐時代の歴史に、「唐鑑」と云ふのが有り、司馬溫公と云ふ人の著した支那歴史を、「資治通鑑」（畧して通鑑）と云つて、國家を治める材料、鑑と云ふ意味の歴史が有る。それらを眞似たものである。

又、漢學者が「東鑑」と書きかへて、支那の書物めかした程有つて、此の「吾妻鏡」の文は、實に、前に掲げたやうな、ヤサシイ口語文で無く、破格と云つて、左に示したやうな、文法に外れた漢文で書いて有る。

二品仰云、於八幡宮寶前、施藝之時、尤可祝關東萬歲之處、不憚所聞食、慕反逆義經、歌別曲奇恠云々、御臺所被申云、君爲流人座豆州給之比、於吾雖有芳契、北條殿飾時宜、潛被引籠之、而猶和順君、迷暗夜凌深雨、到君之

所。亦出_二石橋戰場_一給之時、獨殘_二留伊豆山_一、不知_二君存亡_一、日夜消_レ魂、論_二其愁_一者、如今靜之心忘_二豫州多年之好_一、不_二戀慕_一者、非_二貞女之姿_一、寄_二形_レ外之風情_一、謝_二動_レ中之露膽_一、尤可_レ謂_二幽玄_一、狂可_レ賞_二旣給_一云々。干時休_二御憤_一云々。小時押_二出於御衣_一、於簾外_一、被_二纏頭_一之云々

これは、即ち、先きの、「鶴岡の舞姫」の一部であるが、此の儘では中中讀み悪いから、試に口語文に譯して、掲げたので有る。

彼の「大鏡」にある世繼といふ老人は「世繼の爺は、まこと怖しい爺で御座るぞ。世の中の事、善い事、悪い事みな覺えて居ります。老人だと思つて、若い人達は決して侮りめさるな」と氣焰を吐いて、

明けき鏡にあへば過ぎにしも

今行く末の事も見えけり

と云つて居る。又「世間は鏡」といふ諺も有る通り、此の「吾妻鏡」は實に關東鎌倉武士の寫眞で有つて、上は將軍頼朝、御臺所政子（御臺所とは、昔の大臣、大將軍、將

軍の妻を尊んで云ふ詞)、下は召使の末に至るまで、よい事、わるい事、少しも匿さず、遠慮、會釋も無く有りのまゝ書いて居る。

たとへば、頼朝といふ人は、弟の義經を惡み、範頼を苛めた程、兄弟思ひの足りな人じやが、反對に御臺所政子の方には、非常にあまい人で、天下を取つた英雄も、家庭に有つては、常に政子に遠慮して居た。又一方に、主人頼朝をすら遠慮させ、後には尼將軍と呼ばれて、頼朝の薨後、髪を下して尼になつたが、年若い嫡子頼家、次男實朝の後見までして、立派に政事を行つたほどの政子で有るから、家庭に於ても、若い時分は、随分頼朝に氣儘を云ふて、困らせた人らしい。頼朝は、政子に隠れて自分の好きな事をする、それを見つけて、政子は直様嫉妬の角を生して、かげにまはり、日向にまはつて防害する。

昔の風俗だから、仕方が無いが、此の時代には、立派な人はよく妻の外に妾を置いた。頼朝も政子に隠れて妾を置いた。それを政子は見附けた時の怒りやうは、又と無い。其の一例を「吾妻鏡」から引くと、

頼朝公の寵女に、龜前と云ふのが有つた。元より政子には内々で、伏見の冠者廣綱の家に、かくまうて置いた。處が北條時政の後妻で、政子の繼母に當る牧の方が之を知つて、窺に政子の耳に入れた。此の時、政子は、丁度頼家を生んで百か日ほど経つた時分だが、怒るまいことか、非常に怒つて、牧の方の父、牧の三郎宗親と云ふのを召んで、女の徹、何でも、かんでも其の妾の居る廣綱の家にあはれこんで、どうにかかうにか其の妾を苛めて來いと、牧の三郎を遣はした。牧の三郎、時政の長女なり、頼朝の御臺所の仰で有るから、早速部下を引き連れて行つて、亂暴狼籍、廣綱の邸をたゞき壊すと云ふ騒ぎである。主人の廣綱、彼のお妾を連れて、難を大多和の五郎義久の家に避けた。その爲体と云つたら、廣綱はヤツとのことで逃げた位で有つた。之を聞いた頼朝、氣懸で有るが、元より政子に内證で有るから、何にも云はぬ、政子も政子で、何喰はぬ顔をして居る。

中一日經つて、頼朝其の邊一寸散步に行くと云つて、彼の牧の三郎宗親を御供に、龜前が逃げて往つた大多和の五郎の家に行き、伏見の冠者廣綱を呼び寄せて、一昨日

の出來事を尋ねた。廣綱逐一其の様子を御話した。「以ての外的事だ」と云つて、牧の三郎を召んだ。牧の三郎、今度は低頭平身、只々平謝りにあやまるのみである。頼朝餘りの腹立しさに、刀を抜いて、牧の三郎の髻を切落し「元より御臺所を重んずるは神妙なるが、但し、たとへ其の命令に従ふとも、斯様な事は、一應内々我に報告するが至當で有る。其の儀にも及ばずして、さんぐ恥をかゝせた條、甚だ以て奇怪で有る」と大きに叱つた。宗親、一言の返答にも及ばず、其の場から逃げて仕舞つた。其の翌日の夕方、頼朝は大多和の五郎の家から歸つて來た。然るに北條時政、牧の三郎に對する頼朝の仕打が氣に入らぬと云つて、其の日、急に自分の故里、伊豆の北條へ歸つた。牧の三郎は、即ち時政の後妻の父であるからだ。頼朝聞いて「我に一言の挨拶もなく、自儘に歸國するとは、餘りに氣儘が過ぎて居るぞ」と大きに機嫌を損じた。乃で早速、梶原の源太景季を召んで江間（即ち時政の長子義時のこと）は甚だ穩かな考を持つた男じや。たとへおやぢの時政が勝手氣儘に歸國しても、江間は從いて行きはすまい。どうして居るか、見て來い」と申付けた。梶原早速、義時の邸に行

て見ると、案の通り、義時は在宅である。直様歸つて報告すると、其の義時召べとのことで又行つて召んで来た。

頼朝公、判官代藤原邦通に、義時に云はしめるやうは「あの牧の三郎は怪しからぬ舉動をしたに依つて、此の度勘當を申付けた。然るに、時政、それが氣に入らぬと云つて、自儘に歸國致した段、甚だ以て其の意を得ぬ。然るに汝は、我が命を重んじて父に従はなかつたのが甚だ感心致すぞ。これでこそ、汝は我が子孫の味方となるべき人物である。此の賞に於ては、追つて御沙汰有るべきぞ」と仰せられた。

さて、かの龜前は、右の出來事の爲めに、大に怖氣がさいて、ビク／＼して居る。それにも拘はらず、頼朝公の御寵愛は、尙いや増すばかりで、此の度は、小中太光家と云ふ人の家に移り住んだ。此の結果として、先きに龜前を預つて置いた伏見の冠者は、右筆の職が免職になり、故里なる遠江國に追ひ歸された、——勿論政子立腹の結果である。

一体、この龜前といふ婦人は、どんな人かと云へば、良橋の太郎入道と云ふ人の娘

で、美人じゃないが、氣前のよいのが、ひどく頼朝の氣に入った。——驚いた。斯ういふ事まで書いて居る。

これが、本人の頼朝、政子が讀めば、「たとへ歴史は、有りの儘を書くものにもせよ、こればかりは書いて呉れるな」と云はれる程の事まで書いて居る。

將軍様の事をも、此のやうに遠慮も無く書いて居るから、其の他の人の事は元より知るべしである。そこで「吾妻鏡」には「隠して居るぞ」と思はれる所は、唯の一二か所位で、北條氏がいろ／＼隠謀を企て、天下の實權を握つた怖しい謀も、鏡にかけて見ることがやうに書いて居る。

悪い事も此のやうに包まず書いて有ると同時に、鎌倉武士の立派な事も皆書いて居る。實に「吾妻鏡」は、將軍から知行を貰つて居る役人の筆とも思はれぬ位に、正直に書いて居る。——誰も、よい事は書きたいが、分けて仕へて居る人の缺點は、一寸書き悪いもので有る。それにもかまはず書いて居る處は、實にあの「大鏡」の流である。それ故「吾妻鏡」は、鎌倉幕府の事を調べ、鎌倉武士の面目を研究するには、此上もない結構な歴史で

ある。

私は先頃、鎌倉に遊んで、頼朝や政子、其の他北條家の墓に詣つた。すべて五輪の小さい石塔で、或は僅か二坪ほどの土を盛つた上に据ゑられてあつたり、頼朝や政子の墓も、同じく小さい姿で、チンと立って居た。拜した時に、あの、滑稽なお妾一件を思ひ出して、「此の御墓の前で、「吾妻鏡」のあの部分を讀んで聞かせたら、どうであらう。そんな事も有つたのですか、御はづかしい程、あさましい爲体でしたと、流石の政子も、顔を蔽うで有らう」と思つて、笑出した。こんな、偉い人でも、内輪に這入れば、ヤハリこんな騒をした。——無邪氣と云へば無邪氣。然るに今は地水火風空の五輪と成つては、松吹く風の音ばかりで有る。

そこで思つた。あの「吾妻鏡」を書いた役人は、毎日／＼の出来事を書いて置くばかりで、將軍などが、決して檢閲しなかつたらしい。檢閲でもしたなら、「いくら何でも、是れだけは」と消させたで有らう。

又、當時の人は、餘程立派な人でも、學問が甚だ少く「吾妻鏡」ほどの文章は、よく

讀める人は、中中少なかつた。その證據は、「吾妻鏡」に見えて居る。——あの承久の役に北條義時が大将として、京都へ攻上つたが、後鳥羽上皇様から御諭の院宣が下つた。義時を初め皆々馬から下りて拜聴したが、軍には強い坂東武者も、文字となつては誰も讀めぬ。さて、誰か讀む人が無いかと、總勢五千餘騎雲霞の如き大軍に、尋ねて見ると、只一人武藏國住人藤田の三郎といふ人が居つて、どうやら、かうやら讀んだと有る。御本人の義時すらもチト怪しかつたと見ねばならぬ。

こんな世の中であるから、たとへ「吾妻鏡」を檢閲しても、檢閲なされる御本人が讀めぬ處から、勢ひ、それを書いた役人に讀ませる事となる。かうなつては自由自在じや、そんな處は、ウン／＼と、よんだ振りして飛ばして仕舞ふ。

斯うでも無ければ、とても書く人も、書かれる人も、辛抱が出来ない。これは私の考であるが、果して中つたとすれば、當時の武士が、字のよめ無かつたのが、其の時代の真相を傳ふる點に於て、勿怪の幸ひ、其の又、右筆が立派な人で、遠慮も無く、真相を書くといふ、確乎した主義を持つて居たのが嬉しい。

「吾妻鏡」は、こんな性質の書物で有るから、歴史を研究する學者は勿論、誰が見ても誠に益有る又面白い書物である。——然るに、學者の外には、廣く普く讀まれぬと云ふは例の六つかしい漢文で有るからだ。これは實に惜しいことで、良い滋養物も、あまり固いと、齒の弱い子供達には合はぬが如く、この書物も、其のやうな感じが有る。——それで私は、此の頃口語文に書きかへて、もう出來上つた。齒に合ふやうな柔かな料理と成つて、皆様の前に出るのも直ぐで有る。

けれども、私が思ふ。此のやうに格外な妙な漢文で書かれた處が、實に當時の鎌倉武士の性質氣象によく似て居る。彼の武士は、其の時分の京都の御公卿様のやうな、弱々しい者では無かつた。「いざ」と云へば、甲冑を着て戦つた。其の様子が、此の「吾妻鏡」ばかりが漢文で、全文すべてゴツ／＼した漢字ばかりが並んで居る。「大鏡」や「増鏡」などのやうな、ぬる／＼した、うつくしい假字文の歴史を見た目で、此の書物を見る。其の對照は、實にうつくしい、長々しい、袖も裾も寛りした衣冠束帯、腰に在る立派な太刀も、金銀づくめの裝飾ばかりで實用には立たぬ御公卿様と、熊の皮の尻鞆、頑

丈作りの大きな太刀、鍛へた人は、粟田口久國、來太郎國行と云ふやうな日本一の刀鍛冶が、一日も身を淨めて、一心に成つて鍛へ上げた大業物を、腰も重げに、ぶら下げて、平生とても、行裾の短い木綿の直垂、「いざ」と云は、袖口の露、袴の裾紐づつと搾れば、筒袖、筒袴の身輕の裝束、矢庭に、甲投げかけて「平地でこそ馬には乗れ、此のやうな處では、助けて遣るぞ」と云つて、甲着ながら、馬を背負うて、鵜越の、アノ嶮岨をノソリ／＼と下りる鎌倉武士とを見くらべる様な感じがする。

又、其の文も、文法ちがひの漢文で有る所は、丁度、鎌倉武士が、吾妻訛のダンベイ詞で、口端重く話して居るのに能く似て居る。

其の又、ゴツ／＼した、詞短い漢文で、しかも破格の文章の中に、殊更めかぬ、面白い話や優美な詞や、なまめいた事件や、和歌まで挿んで居る處は、上には兜虫のやうな、いかめしい鐵の甲は着、詞は濁つたダンベイ詞で、しかも訥辨な鎌倉武士が、男らしいリンとした處が有ると同時に、口ではすら／＼と面白く話すことが得せぬが、心の中には有り餘るほどな、優しい、優美な情が有つて、酒宴をして興に入ると、秩父の重忠と云

ふ、武藏國の西の山里、秩父郡の住人畠山の重忠のやうな、謹直な好人物、これも必ずダ
ンベイ詞で有つたと思はれる人ですら、よい聲で有つたと見えて直ぐと銅拍子打つて、
謠ひ出すと云ふやうな粹な處もあり、又は「此處は、白河の關と云つて、昔能因法師が、
都をば霞とともにたちしかど

秋風ぞ吹く白河の關

と謠つた名高い名所じや。景季一首如何に」と頼朝卿が仰すると、馬を扣へて取りあへ
ず、

秋風に草木の露を拂はせて

君が越ゆれば關守もなし

と、人間が悪いと云はれた景時の長男とも思はれぬ程の歌人が有るのに似て居る。

又、毎日／＼の出來事を何でも、彼んでも、書きつけた日記体の歴史で有るから、統
一が無いと云へば、其のませ／＼に書いて居るのが欠點と云ふことになるが、讀む方か
ら云ふと、時には、これが面白みを添ふる書き方となる。——即ち、鎌倉の方では、頼

朝と政子とが、夫婦喧嘩して居るかと思へば、其の日、西國の方では、範頼、義經が爰
を先途と軍して居る。——前の舞臺では、いろ／＼優美な又は哀れな事が起つて居たが、
クルリと變つた今の舞臺では、チャン／＼と火花を散して斬合つて居る様だと見れば見
られて、同じ日の中に、眞面目な事、をかしい事が雜つて居る。「吾妻鏡」の面白いのも、
一つは、こんな書き方の故である。——此の書は元來、文學の書物で無いが、偶然にも
文學的書物に成つて居るのが面白い。

又「吾妻鏡」を見ると、宛ら、其の時代の鎌倉市中を見物する様な思がする。鶴岡八
幡宮には、將軍の御參詣で、御神樂がある。舞臺では、靜御前と云ふやうな奇麗な舞姫
が、「よしの山峰の白雪」と歌つて居る。——笛の音もする、太鼓の音も聞えて、今日の
能芝居を見るやうな思ひがする。

鳥居の處には、昔の佐藤兵衛尉藤原憲清と云つた西行法師は、錫杖ついて歩いて居
る。

「ヤレ、由比濱で、曲者を搦め捕つた。逃すな。やるな」と、甲冑で皆々走る。

ソレ又、火事だ、御寺の鐘がなる、貝も吹く、風が起つて、何軒焼けた。
ソレ又、地震じや、ソレ海嘯じや、洪水じや、家が何軒、人が何人、流れた、焼けた、
風で倒れた、慧星が出た、何かの前兆で有らう。鶴岡八幡様の鳩が二羽死んで居た、凶
い事の前兆でも有るまいか。

市中が狭い、あまり多くも無い往來の人に突き當る、喧嘩が起る。坊主も通る、厄さ
んも来る。武士も行く。遊女も見える。

向ふの方には立派な建物。………行つて見ると將軍の邸、即ち幕府で、此處には時
折蹴鞠の遊があるらしい。

文注所と云つて、今の裁判所の前を通ると、世間は廣い、領地の奪り合ひで、毎日の
やうに公事訟訴の沙汰が有つて、負けた腹立には、直様坊主になる人も有る。さうか
と思へば、折角頂いた銀製の猫の置物を、しかも將軍様から頂いた寶物を、門を出ると、
直様、里の子供に遣つて仕舞つて我身は軽く、雲水の行脚に出づる法師も有る。

このやうに、當時に於ける鎌倉の様子、武人の人情風俗、細い事、大きい事残らず見

ゆるのが此の「吾妻鏡」五十一卷。

吾妻鏡の話

○因に記す。併し、私が、此處で、源頼朝卿や政子の方の家庭向きの事を話した
譯は、決して、悪い心で話したので無い。只「吾妻鏡」といふ書物は、何でも
正直に書いて居る書物で有るといふことを、皆様に知らせたい爲めで有る。實
は、頼朝卿や政子の方は、なか／＼稀な英雄で、又非常に神佛を尊敬し、朝廷
に對しては、此の上も無く敬順に御奉公した立派な人で有る。只今、よく云ふ
武士道も、多くは、鎌倉時代に發達したので、此の頼朝卿が之を奨励し、之を
發達せしめたので有る。願はくば讀む人よ。決して、頼朝卿の大人物たること
を忘れてはならぬ。事の序に、一寸、断つて置く。

日本文學物語 (歴史部) 大尾

明治四十五年五月十日印刷
明治四十五年五月五日發行

(日本文學物語
歴史の巻)
(定價 金七十錢)

不許複製

著 者 芝 野 六 助

發 行 者 東 京 市 神 田 區 駿 河 臺 南 甲 賀 町 九 番 地
清 水 金 右 衛 門

印 刷 者 東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 百 〇 八 番 地
萩 原 勝 三 郎

印 刷 所 東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 百 〇 八 番 地
博 文 館 印 刷 所

發 行 所 東 京 神 田 駿 河 臺 興 文 館

振替口座東京一七八〇五番

興文館直取引店

神田	麻布	京橋	京橋	京橋	神田	京橋	日本橋	神田	市内!
勉強堂	森江書店	良明堂	目黒書店	東海堂	上田屋	北隆館	至誠堂	東京堂	
長野市	熊本市	新潟市	金澤市	名古屋市	京都市	大阪市	久留米市	地方!	
西澤書店	長崎次郎	西村萬松堂	宇都宮書店	百架堂	東枝書店	福音社	盛文館		
							菊竹金文堂		

大聖釋迦牟尼佛

口繪 釋尊肖像外五葉。アーノルド氏肖像人

報知新聞批評

文學博士 井上哲次郎先生序文
 文學博士 高楠順次郎先生序文
 文學博士 前田慧雲先生序文
 エドウチン、アーノルド氏原著

共譯者
 中川太郎先生
 濱口惠璋先生
 狩野廣崖先生

菊列十六行三段組
 總かなつき美本
 並製五拾五錢
 郵税金八錢

本書の價値

本書は、英國の大詩人エド・キン、アーノルド氏によりて佛陀の性質來歴及び
 教理の概要をば流暢偉麗の筆を揮ひ、温雅婉曲の辭を聯ねて撰説したるものな
 り、蓋し歐米人にして亞細亞に此の一大宗教のあるを知るもの殆んど無かりし
 も、氏に依りて初めて此の千載不磨の大宗教を紹介するを得たり、而して今
 又た宗教界爲學の士、中川太郎、濱口惠璋、狩野廣崖の三氏に依りて七五調の韻
 文に疊み流麗の筆致を以て和譯せられたり實に本書の如きは近來に於ける我が
 出版界其の比を見ざる一大雄篇なり、吾人は近きに於て獨特の一大論評を試み
 ることあるべし

發行所 東京 興文館
 東京 神田 興文館
 東京 河原 興文館

當代二十五名士合著

名士の釋尊觀

通俗教育調査委員會審查濟

菊列全一册
總かなつき
並製五拾五錢
郵税金八錢

執筆大家

大隈伯爵 井上博士 南條博士 新渡戸博士
 村上博士 松本博士 姉崎博士 加藤博士
 近角學士 常盤學士 大内青巒 佐々木月樵
 本多日生 望月信亨 蜷川學士 鎌田榮吉

其他の名士が大聖釋迦牟尼佛に對して種々の方面より論評を試みたるものにして、最も趣味ある讀物たり、

發行所 東京神田駿河臺 興文館

興文館近刊書目

世界歴史物語 全七册 各册同體裁

- 第一編 英國歴史物語 已刊 定價五十錢 郵税六錢
- 第二編 米國歴史物語 近刊 定價五十錢 郵税六錢
- 第三編 佛國歴史物語 近刊 定價五十錢 郵税六錢
- 第四編 獨逸歴史物語 近刊 定價五十錢 郵税六錢

第一英國歴史は己に發行せり、我國少年少女及び一般家庭の讀物として、非常なる高評を博し、初版再版將さに賣盡すの盛況、同盟親善國の歴史を知らざるは恰も我が親歳の身柄を知らざるが如し。競うて愛讀を祈る

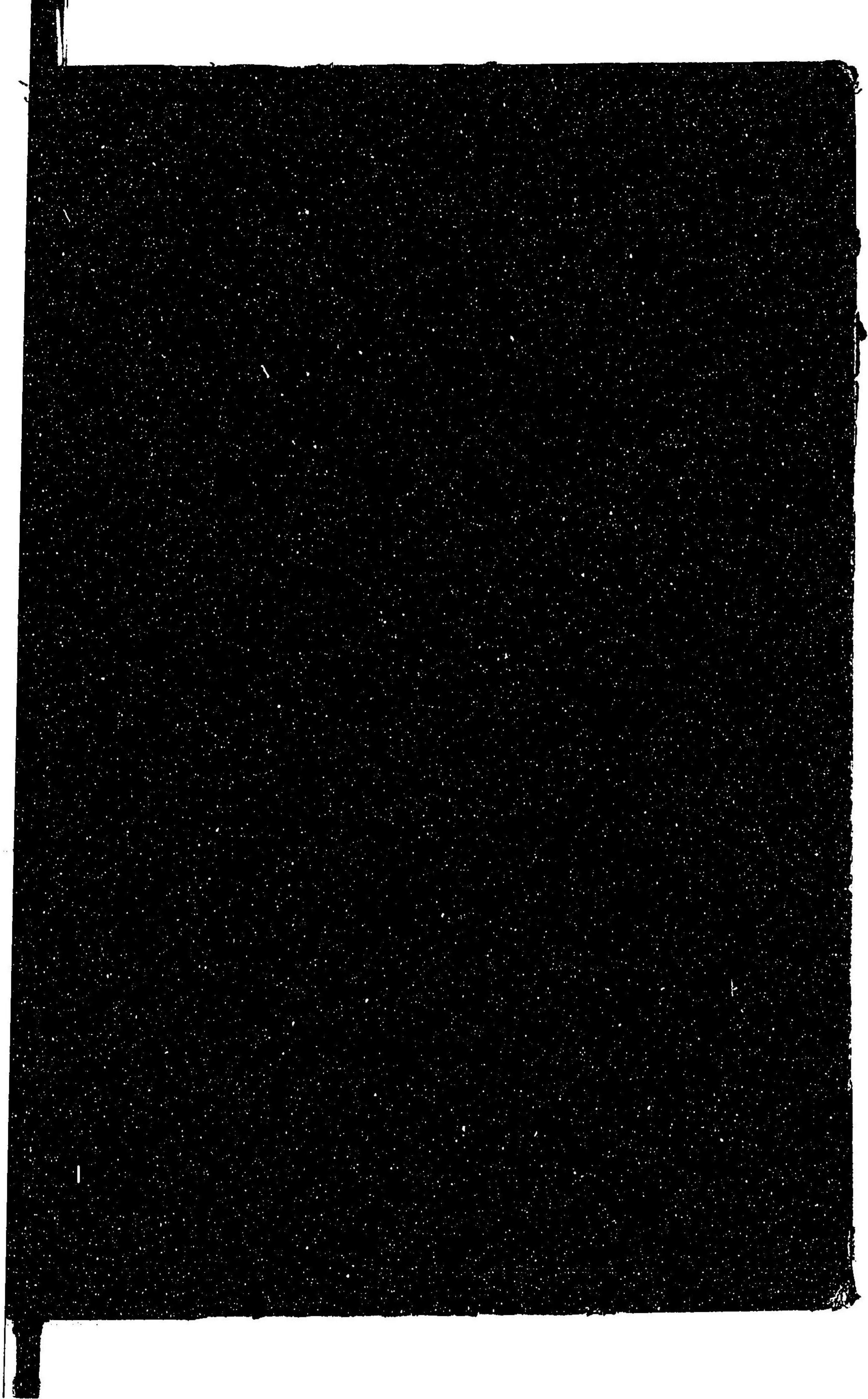
興文館近刊書目

著者	書名	版	定價、郵税
西村晃一著	英國歷史物語	新刊	定價五十錢 郵税六錢
岡悌治著	米國歷史物語	新刊	定價五十錢 郵税六錢
芝野六助著	日本文學物語	新刊	定價七十錢 郵税八錢
村上助三郎著	東京闇黒記	新刊	定價八十錢 郵税八錢
濱口惠璋編	七里和上言行錄	新刊	定價二圓七十錢 郵税十六錢
濱口惠璋譯	大聖釋迦牟尼佛	四版	定價八十錢 郵税八錢
清水弘道編	名士の釋尊觀	再版	定價八十錢 郵税八錢
蟠川龍夫著	日蓮聖人傳	四版	定價八十錢 郵税八錢

興文館發兌書目

著者	書名	版	定價、郵税
金森通倫著	貯金のすゝめ	百〇五版	定價二十八錢 郵税四錢
蟠川龍夫著	孔子傳	四版	定價八十錢 郵税八錢
佐々木月樵著	實驗之宗教	五版	定價八十錢 郵税八錢
曉烏敏著	死の問題	五版	定價二十錢 郵税四錢
坂田ドクトル著	新式健腦法	十九版	定價二十錢 郵税二錢
井上ドクトル著	新式強眼法	十二版	定價二十錢 郵税二錢
青柳有美著	有美全集	三版	定價八十錢 郵税六錢
富永定太郎著	酒道樂	三版	定價四十五錢 郵税六錢
井上ドクトル著	トラホーム一夕話	五版	定價五錢 郵税二錢





084978-000-2

340-11

日本文学物語 第1編 歴史の巻

芝野 六助/著

M45

DBB-0392

